

# 老 司 A 遺 跡

－第1次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1245集

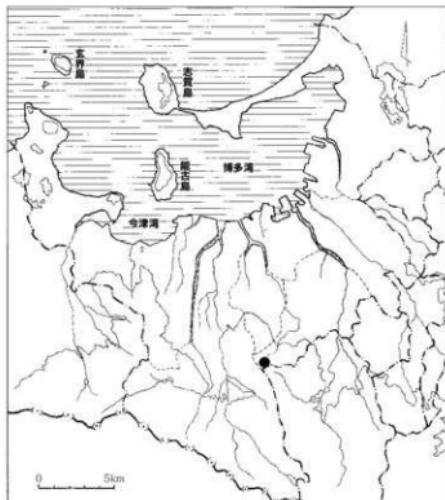
2 0 1 4

福岡市教育委員会

# 老司 A 遺跡

－第1次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1245集



遺跡略号 RZA1

調査番号 7836

2014

福岡市教育委員会



## 序

古来より福岡市は、玄界灘を介して朝鮮半島や中国大陆との文化交流の窓口として、長い歴史を積み重ねてきました。それは市内に残る最古の農業集落である板付遺跡、朝鮮半島製青銅器類や漢代鉄製武器・鏡鑑を多く出土した吉武遺跡群墓地、大宰府の出先機関として内外の交流の拠点となった鴻臚館跡、中世以降には広く東アジアとの対外交易の拠点となった博多遺跡群など数多くの文物が残されていることからも充分窺えるところです。

さて今回報告をしますのは、市域の東部を南北に貫流する那珂川の中流域左岸の丘陵地に所在する南区「老司A遺跡」の第1次調査に関するものです。

本遺跡は、弥生時代前期から古墳時代中期にかけての集落・墓地群であり、今回の調査成果は福岡平野南部地域の歴史的推移を探る上で欠かすことの出来ないものと考えられます。

また本遺跡の調査は、昭和53年福岡市が経験した未曾有の大渇水の時期に行われたものですが、それから35年の時間を経て漸く刊行する運びとなりました。調査にあたりご協力を戴いた地権者様をはじめ関係者の方々に対し深甚の感謝を申し上げますとともに本報告書が地域の歴史資料として、また学術的にも活用されることを願ってやみません。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

## 例　言

- 1.本書は、住宅建設に伴い、昭和53(1978)年7月5日から同20日まで緊急発掘調査を実施した福岡市南区老司字本所在の「老司A遺跡」(通称：老司観音山)の第1次の調査報告書である。
- 2.発掘調査は、福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係が実施した。
- 3.本書に使用した遺構の実測図作成及び遺物の実測は、担当者 飛高憲雄、力武卓治、横山邦繼が行った。
- 4.本書に使用した遺構写真的撮影は力武による。
- 5.本書に掲載した遺物類の整理は、調査担当者が行った。
- 6.本書に掲載した図面類の整図・製図及び執筆は横山が行った。
- 7.発掘調査で出土した遺物や実測図・写真などの記録は、本市「収蔵要項」に基いて整理を行い、埋蔵文化財センターに収蔵し、今後の利活用に付す予定である。

## 本文目次

第一章	はじめに	頁
	1.調査に至る経過.....	1
	2.調査の組織.....	1
第二章	遺跡の立地と環境.....	2
第三章	調査の記録	
	調査概要 .....	3
	1.袋状竖穴.....	4
	2.石棺墓及び溝状遺構.....	9
第四章	おわりに .....	13

## 挿図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図 (1/25000) .....	2
Fig.2	調査地点位置図 (1/5000) .....	3
Fig.3	調査区現況測量図 .....	4
Fig.4	遺構出土状況全体図 (1/50) .....	5
Fig.5	表土及び表面採集遺物実測図 (1/3・1/2) .....	6
Fig.6	第1号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30) .....	6
Fig.7	第2号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30) .....	7
Fig.8	第3号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30) .....	8
Fig.9	第4号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30) .....	9
Fig.10	袋状竖穴内出土遺物実測図 (1/3・1/1) .....	9
Fig.11	第1号石棺墓出土状況実測図 (1/20) .....	10
Fig.12	第1号溝状遺構出土状況実測図 (1/30) .....	11
Fig.13	第1号溝状遺構出土土師器実測図 (1/3) .....	11
Fig.14	卵内尺古墳群・老司A・和田B遺跡の貯蔵穴集成 (1/200) .....	12
Fig.15	卵内尺古墳群・老司A遺跡の円墳群 (1/500・1/100) .....	13
Fig.16	袋状竖穴類型図 (1/120) .....	14

## 図版目次

PL.1	1.調査前現況（中央に石棺、南から）、2.石棺墓発見状況（東から）、3.石棺墓発見状況（南から） 4.調査作業状況（南から）、5.石棺墓調査状況（西から）、6.石棺墓調査状況（西から）
PL.2	1.袋状竖穴群出土状況全景（西から）、2.第1号袋状竖穴出土状況（西から） 3.第2号袋状竖穴出土状況（南から）、4.第3号袋状竖穴出土状況（西から） 5.第4号袋状竖穴出土状況（南から）
PL.3	1.第1号石棺墓出土状況全景（西から）、2.第1号石棺墓出土状況（開棺前、南から） 3.第1号石棺墓出土状況（開棺時、南から）
PL.4	1.第1号石棺墓出土状況（開棺時、東から）、2.同頭位石枕出土状況（南から） 3.石棺墓墳丘状況（南から）、4.第1号溝状遺構内土師器出土状況（北から） 5.第1号溝状遺構内土師器出土状況（南から）

# 第一章　はじめに

## 1. 調査に至る経過

昭和53年（1978）7月3日、南区老司字本在住の地権者より自宅増築工事の際に石棺らしい遺構が出土したので、調査してほしいとの連絡があった。不時発見の遺跡である。これを受けて教育委員会文化課では下記の調査班を編成し、同月5日より調査を開始した。対象地は、周辺が椎、檜などの照葉樹林で覆われており、比較的大径木が多かつたため、調査にあたってはこれらの伐採と抜根に多くの時間を要した。又、同年は福岡大旱魃の年であり、時間給水が既に始まっており、太陽光が激烈な中での発掘作業となった。

## 2. 調査の組織

調査主体： 福岡市教育委員会

発掘調査： 昭和53年度

調査総括： 文化部文化課

課長 井上 剛紀

同課埋蔵文化財係長 柳田 純孝

調査庶務： 文化課管理係

管理係長 三宅 安吉

管理係 古藤 國生

調査担当： 文化課埋蔵文化財係

文化財主事 飛高 憲雄、力武 卓治、

横山 邦継

（整理報告 平成25年度）

整理・報告総括： 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 宮井 善朗

同課調査第2係長 横本 義嗣

整理・報告庶務： 埋蔵文化財審査課管理係

川村 啓子

整理・報告担当： 文化財保護課

横山 邦継

尚、文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局へ移管した。

### 【調査日誌抄】

- ・7/3 発掘機材搬入・水準点の移動（老司小学校より）
- ・7/4 現地現況測量。
- ・7/5～7 発掘調査開始し、第1号石棺墓掘り下げ終了。
- ・7/8 調査区全体を拡張調査。南側尾根で土器包含層を検出。
- ・7/10 第1号石棺墓実測調査。
- ・7/11～14 石棺墓下に袋状竪穴を検出し、掘り下げを進める。
- ・7/17 第1・3号袋状竪穴写真撮影・実測調査、遺構全景撮影。
- ・7/18 第1・3号袋状竪穴実測調査終了・同竪穴の埋戻し・調査区全体測量（1/50）。
- ・7/19 第4号袋状竪穴を検出し、第2号竪穴と共に写真撮影・実測調査終了・全体の埋戻し作業開始（～18:30）。
- ・7/20 ランマー・プレートを使用し、調査区全体の埋戻し終了。

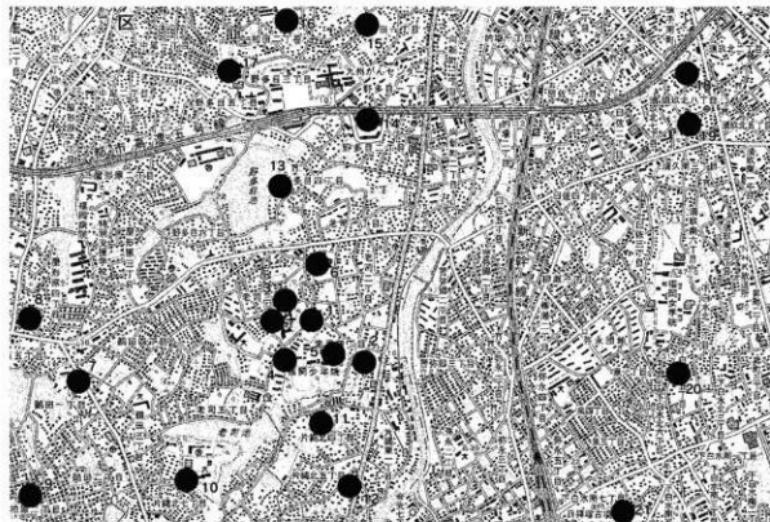
## 第二章 遺跡の立地と環境

老司A遺跡の所在する福岡平野南部には、脊振山系から東に延びる多くの小支脈群があり、その一つに遺跡も立地する。また、遺跡東方には福岡平野南部にその源を発し、西側を貫いて博多湾に注ぐ那珂川があり、本遺跡はその中流域左岸に広がる小冲積地に接する標高27m前後的小丘陵頂部に立地する。

本遺跡周辺では、過去の調査から歴史的に旧石器時代から古代、中世期の遺構が分布することが知られている。まず、縄文時代晚期～弥生時代前期では野多目A・B遺跡で初期水田に伴う水路や水口遺構が知られ、野多目C遺跡では弥生前期後葉～中期初めの竪穴住居、貯蔵穴群、北西側の和田B遺跡では前期中葉の貯蔵穴群、中期前葉の土壙群などが検出されており、弥生時代の集落形成が確実である。

次に古墳時代になると丘陵の東端一帯に福岡平野最大の前方後円墳である老司古墳をはじめ卯内尺前方後円墳、円墳群など5～6世紀の古墳群が多く築造されるようになる。またその分布は、北から箱池古墳、三十田古墳、群集墳の大牟田古墳群・若山古墳群、古墳時代前半期に位置づけられる野口古墳群・觀音堂古墳・野多目古墳群などが知られる。

また、那珂川を挟んだ右岸地域には、須玖御陵古墳・自水大塚古墳・日拝塚古墳などの前方後円墳が分布しており、奥津城として選ばれたこれらの古墳群と共にこの地域の生産性の実像を探っていく必要があろう。また、古代では九州最古の官寺とされる觀世音寺の創建瓦類を焼成したと考えられている老司瓦窯跡などが知られる。



1. 老司A遺跡、2. 老司B遺跡、3. 卯内尺古墳群、4. 老司古墳、5. 老司瓦窯跡、6. 野多目C遺跡群、7. 箱池古墳、8. 三十田古墳、9. 大牟田古墳群、10. 若山古墳群、11. 野口古墳群、12. 觀音堂古墳、13. 野多目古墳群、14. 野多目A道跡、15. 三宅B道跡、16. 和田A道跡、17. 和田B道跡、18. 須玖御陵古墳、19. 野口古墳、20. 下白水大塚古墳、21. 日拝塚古墳

Fig. I 周辺遺跡分布図 (1/25000)

### 第三章 調査の記録

**調査概要** 老司A遺跡第1次の調査では、宅地造成の対象となった約50m<sup>2</sup>の調査区で弥生時代前期後半期と考えられる袋状貯蔵穴4基、古墳時代中期箱式石棺墓1基とこれに伴うと考えられる溝状造構1条を検出した。またこれらの時期を示す該期の遺物は極めて少量であった。本調査は不時発見の調査であったが地権者の十分な協力を戴き、建築に支障無く調査を完了することが出来た。



発掘調査に参加された方々

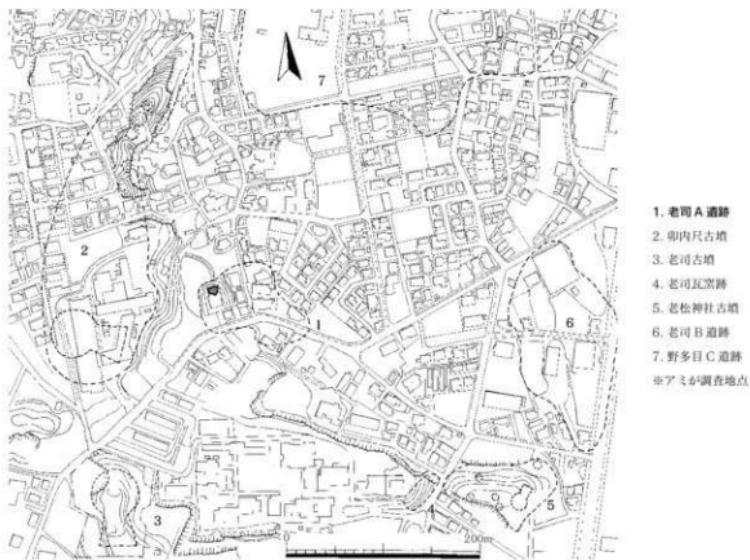


Fig.2 調査地点位置図 (1/5000)

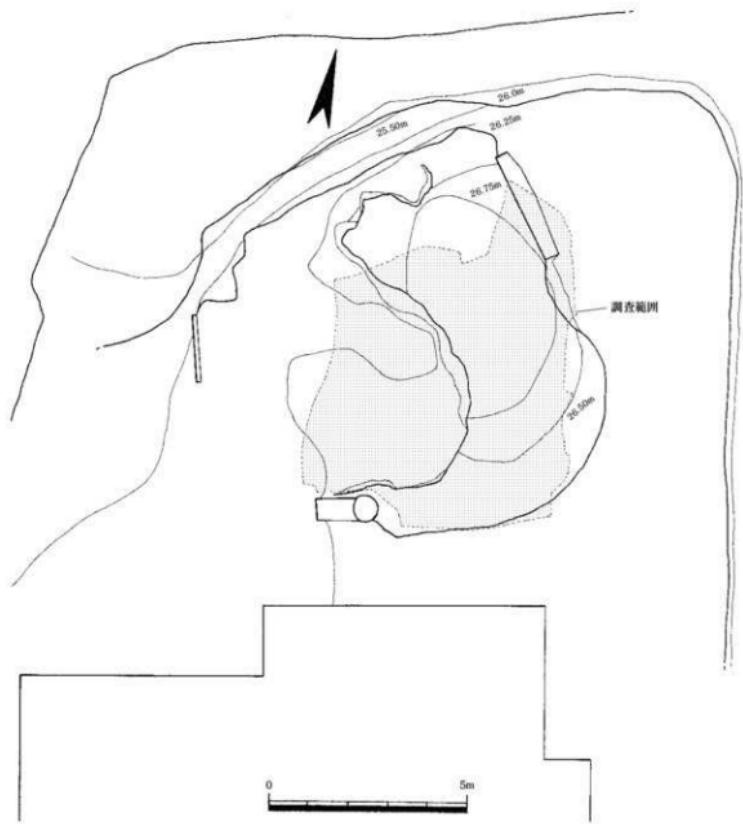


Fig.3 調査区現況測量図

### 1. 袋状豎穴 (Fig.4・6~10、PL.2)

袋状豎穴は、第1号石棺墓の墓壙調査の際に花崗岩地山に柔らかく、埋土と考えられる部位が発見されたため、石棺墓調査後に遺構面全体を下げてはじめて検出できたものである。

その分布は、調査区の北側に3基（第1・2・4号）と南側に1基（第3号）にあり、分布上各々は切り合いを持たず、造営時期の同時性を示すものと考えた。

#### 第1号袋状豎穴 (Fig.4・6、PL.2)

本豎穴は、調査区東端で検出し、東側の一部は未掘である。上部の平面形は隅丸長方形をなすと考え

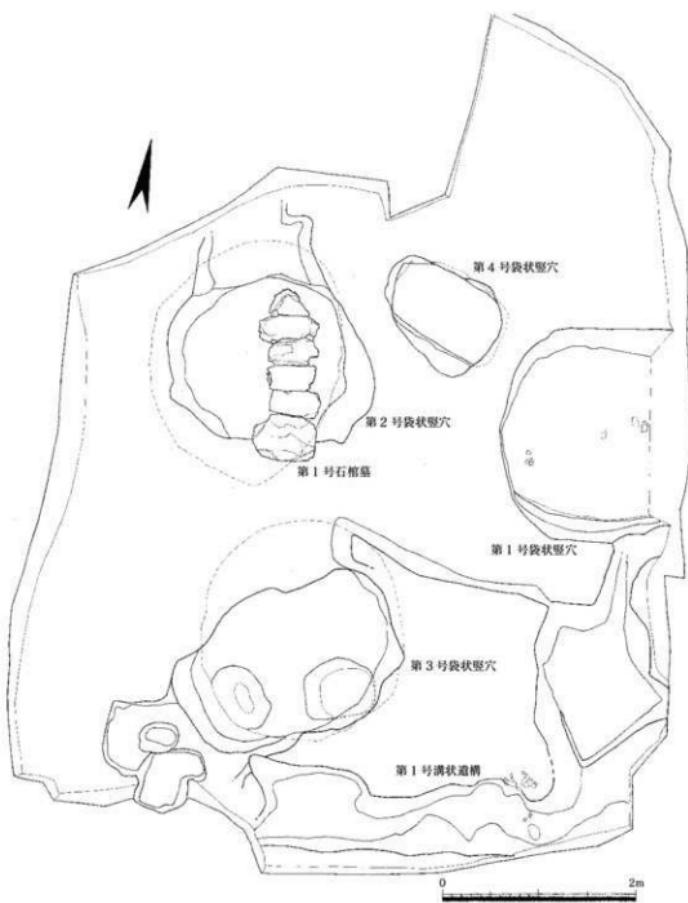


Fig.4 遺構出土状況全体図 (1/50)

られる。規模は、東西長2.09m・南北長1.52m以上・深さ1.49m以上をはかる。壁面はやや外方に開きながら直線的に伸び、壁南側は一部に剥落がみられる。また床面は緩く皿状に隆起し、南北長1.7mをはかる。本竪穴の埋土は殆んどが花崗岩バイラン土であり、底面附近に僅かに炭化物を含む薄層が見られた。竪穴に伴う遺物は床面近くで少量が出土した。何れも小破片であり、図化に耐えない。それらは甕口縁部破片1、壺口縁部破片1、鉢口縁部(?)破片1、壺底部破片1、その他胴部破片29点などで板付II式の特徴をもつものである。

第2号袋状竪穴 (Fig.4 · 7 · 10、PL.2)

本竪穴は、調査区北西隅で検出した。平面形はほぼ円形をなす。東側は崩落に寄り縁辺が大きく広がる。規模は東西長1.8m・南北長1.7m・深さ2.5m以上をはかる。

また壁面は緩い袋状をなし、中位以下では更に特徴的な袋状を造り出している。底面は、長方形をなし、緩く窪む。規模は南北長1.95mをはかる。またこの竪穴の埋土は、殆んどが花崗岩バイラン土で占められる。竪穴に伴う遺物は、サスカイト製打製石鏃1、土器胴部破片11点である。

打製石鏃10002は、打点を先端部に持つ剥片使用の無茎式鏃である。先端部・側辺にトリミングを加える。全長2.4cm、最大幅2.3cm、厚さ0.5cmをはかる。

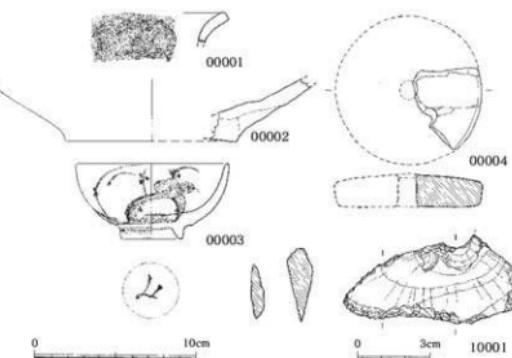


Fig.5 表土及び表面採集遺物実測図 (1/3 · 1/2)

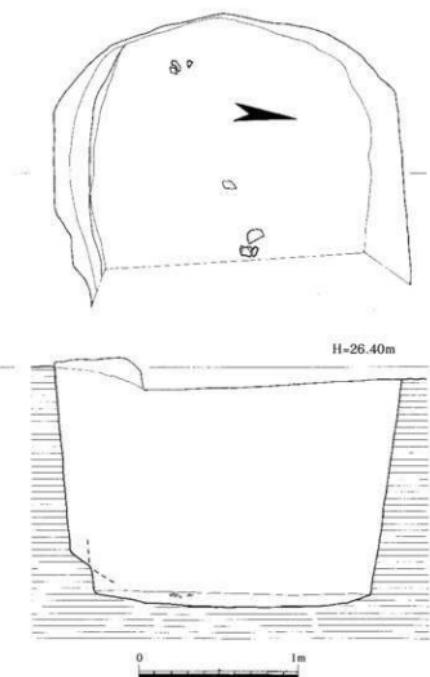


Fig.6 第1号袋状竪穴出土状況実測図 (1/30)

第3号袋状竪穴 (Fig.4・8・10、PL.2)

本竪穴は、調査区南端で検出した。平面形はほぼ長方形をなし、長軸をほぼ東西方向にとる。隣接する南側ではピット・土坑状竪穴から切られる。規模は、東西長2.3m・南北長1.6m・深さ2.6mをはかる。

また壁面は、緩い袋状をなし、中位以下では抉り深く袋状をなす。底面はほぼ円形をなし、ほぼ水平で、長さ2.08mをはかる。また床面の北西側壁近くには径が71×61cm・深さ59cmをはかる不整な長方形の土坑が付設されている。貯蔵上の補助的な役割を持ったものか。更に床面東壁には浅い長方形の土坑が認められる。規模は、70×58cm・深さ50cm未満である。位置的には竪穴への昇降用梯子の下部固定位置ではないかとも考えられる。

本竪穴に伴う遺物は、サヌカイト製打製石鏃1・甕口縁部破片1・他に胴部破片12点などである。打製石鏃10003は、基部が緩くカーブを描く凹基無茎式鏃であり、先端部・側辺部とともに

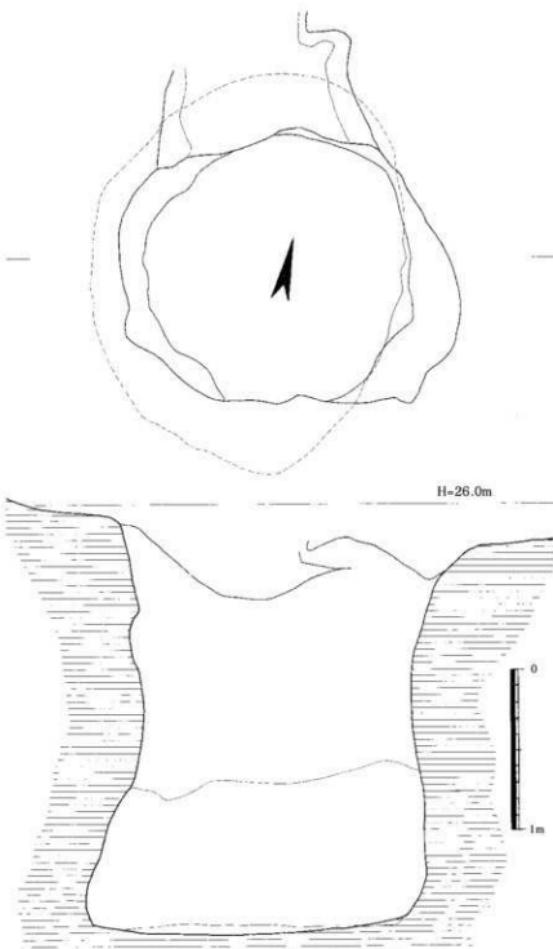


Fig.7 第2号袋状竪穴出土状況実測図 (1/30)

細調整が整った製品である。全長2.8cm・最大幅1.9cm・厚さ3.5mmをはかる。また甕00005は、口縁部の小破片である。如意状に緩く開く口縁を有し、口縁端部の下端に刻み目を施す。板付II式土器である。外面は火に遭って器表が脆く、剥落している。器色は口縁内面が黄褐色、胴部内面は赤褐色を呈する。胎土に石英粗砂の混入が多く、焼成は軟質である。

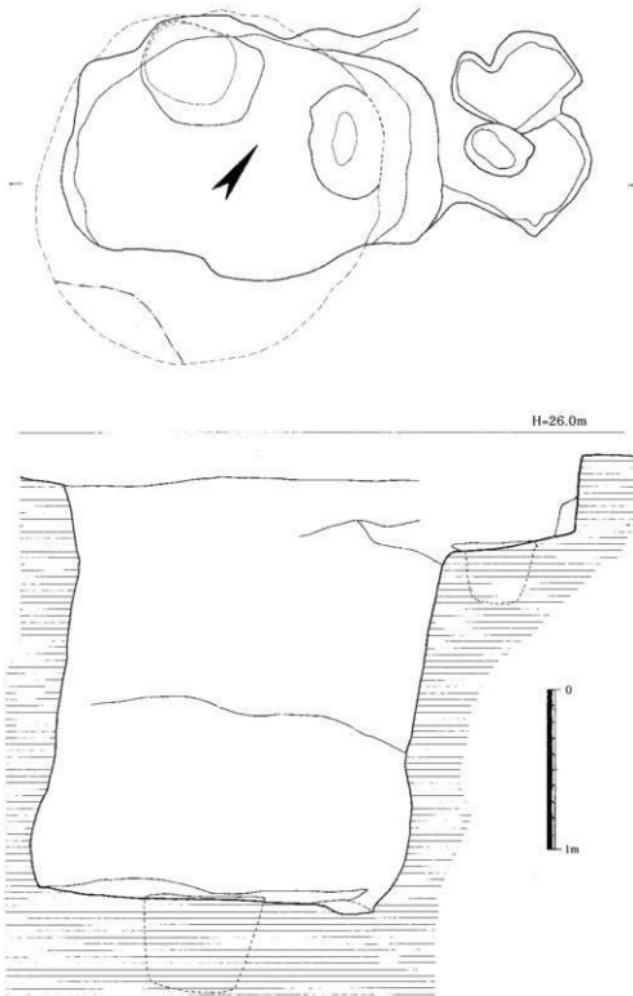


Fig.8 第3号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30)

#### 第4号袋状竖穴 (Fig.4・6・9, PL.2)

本竖穴は、調査区北側の第2号竖穴と隣接した位置で検出した。平面形はやや東側がバチ形に開く不整な長方形をなす。また壁面は東側及び北側は緩く袋状をなす形状である。規模は、東西長1.28m・南北長0.86~1m・深さ0.9m以上をはかる。また床面は中央部がやや窪み、東西長1.22mをはかる。共

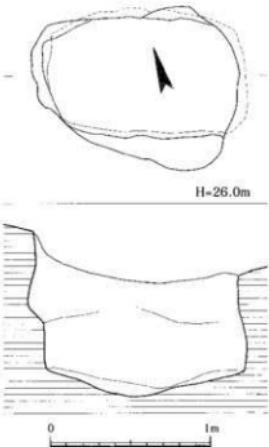


Fig.9 第4号袋状竖穴出土状況実測図 (1/30)

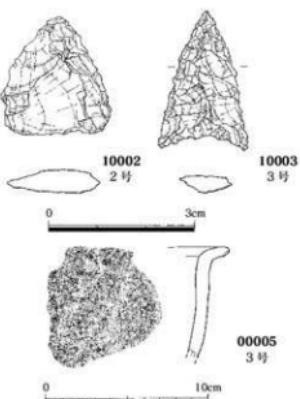


Fig.10 袋状竖穴内出土遺物実測図 (1/3・1/1)

伴する遺物類は出土しなかった。本堅穴は検出当初、土壙墓の可能性を考えたが、前記のような壁面の特徴からここでは小型の袋状堅穴と考える。

## 2.石棺墓及び溝状遺構 (Fig.3・6・11・12・13, PL.1・3・4)

### 第1号石棺墓 (Fig.3・6・11、PL.1・3・4)

本石棺墓は、今回調査のきっかけとなった箱式石棺墓である。発見時は、石棺蓋石の南側二枚分がほぼ露出した状態であった。その後、調査前に現況測量の際には25cm間隔のセンター図を作成しているにも拘らず、事業の緊急性もあり、古墳としての墳丘の存在を十分に認識することが無かったと言つて良い。墳丘は、現況測量図に基けば少なくとも墳高50cm以上の封土があった可能性が高い。

石棺法量は、内法で側壁長1.6m・小口幅0.3~0.35mをはかる。内面は西側側壁が土圧のため東側に倒れ込んでいるため幅員は不揃いであり、石枕のある頭位附近が特に広いという状況にはなかった。

また、蓋石下面より死床の床面までの深さは、0.28~1.3m程度である。

更に、南小口部分には埋葬頭位と考えられる位置に花崗岩円礫2個を「ハ」字形に配置した石枕が認められ、石棺内面は赤色顔料が真っ赤に塗布されていた。また蓋をする以前の灰白色粘土を使用した目張りが小口・側壁の外面に張り付けられている。使用された石材は、全体で19枚である。結晶片岩の板石を多く使用し、小口2枚・側壁東側6枚・同西側5枚を使用している。厚さは何れも8~10cmのものである。また蓋石には6枚を使用し、1枚は花崗岩である。蓋の置き方は北側から南側へ被せる。つまり足元から頭部にむかって蓋をしている。

石棺墓掘方は、南側の小口部に一部が窺えるが、他は第2号袋状堅穴の埋土内にあるため、調査では十分に明らかに出来ないため復元的に図化している。なお、石棺墓内部や周辺には副葬・供獻などの遺物は出土していない。

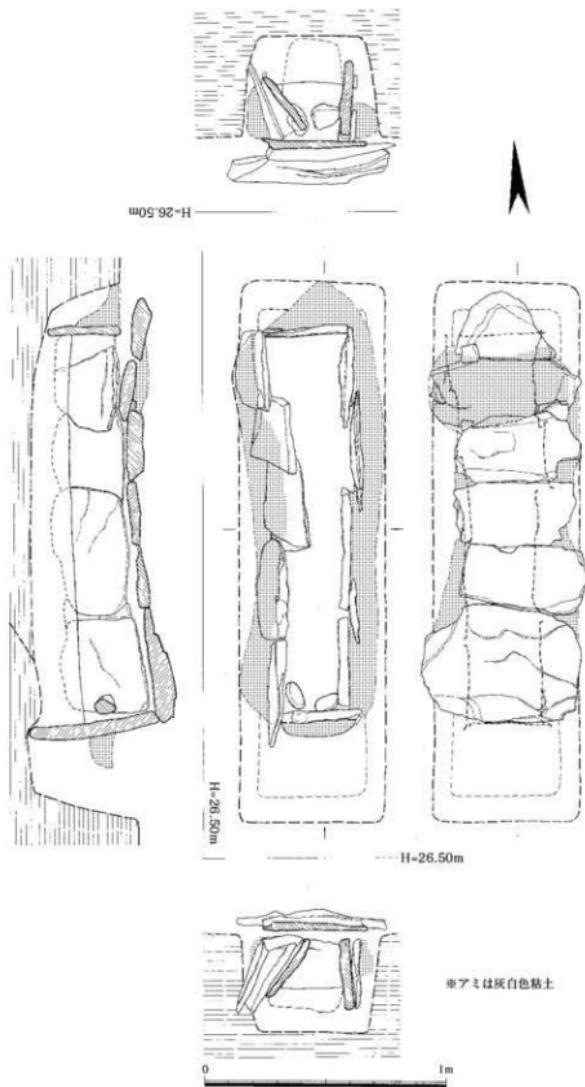


Fig.11 第1号石棺墓出土状況実測図 (1/20)

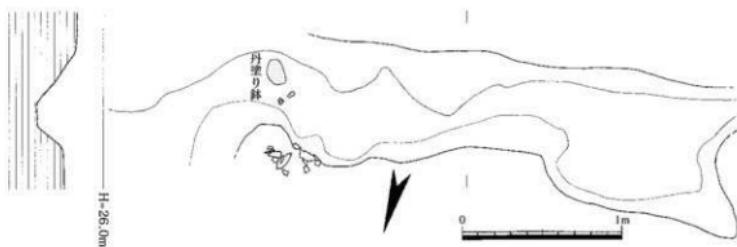


Fig. 12 第1号溝状遺構出土状況実測図 (1/30)

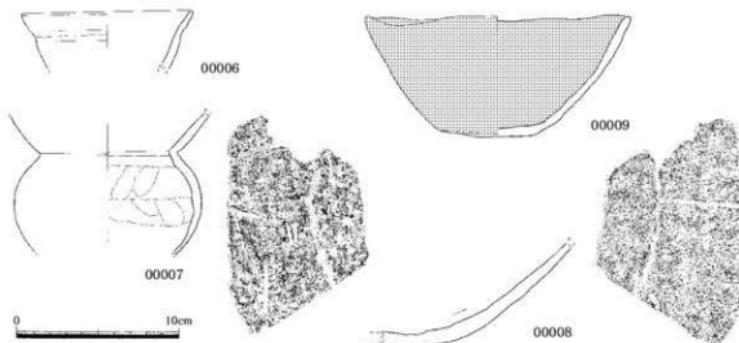


Fig. 13 第1号溝状遺構出土土師器実測図 (1/3)

#### 第1号溝状遺構 (Fig. 6・12・13、PL.4)

調査終了時近くに調査区南端部で検出した。東西に延びる不整な溝遺構である。延長3.85m以上・深さ0.25m以上の規模である。埋土は、やや黄色味を帯びた花崗岩バイラン土であり、一部に炭化物を含む。溝は、南側には緩く、北側には比較的急激に立ちあがる断面をなす。溝の西側内部や縁辺では土師器類が出土しており、上記箱式石棺墓と関連を窺うことができよう。本溝状遺構が第1号石棺墓の周溝の一部と考えると、溝内罫ラインから石棺中心までが約4mあり、これで復元すると径が約8m程度の低い墳丘をもつ円墳と考えることもできよう。本溝に伴う土器類は全て土師器であり、完形の丹塗り鉢1点・甕破片・丸底壺2点などである。小型丸底壺00006は、底部を欠く薄手の壺である。頭部は鈍く窪み、直線的に外方へ延びる。内外面共に磨滅が著しく、器色は淡赤褐色を呈する。胎土に赤色粒を含み、焼成は軟質である。口径10.5cmをはかる。同00007は、口縁端部と底部を欠く壺である。口縁はやや膨らみ、胴部は半球状をなす。器色は内外面共に淡赤褐色を呈する。調整は胴部内面に指オサエが残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。頭部径8.6cm・胴部最大径11.6cmをはかる。甕00008は、不安定な甕底部破片である。器色は暗赤褐色を呈し、外底部に一部黒班が見られる。胴部下端に荒いハケメが痕跡的に残り、内面は荒いヘラケズリを施す。胎土に石英粗砂・赤色粒を多く混入し、焼成は堅緻である。丹塗り鉢00009は、不安定な平底の小型鉢である。口縁はかなり波打っており、内外面共に丹塗りである。送葬具として使用された可能性があろう。口径16.6cm・器高7.6cmをはかる。

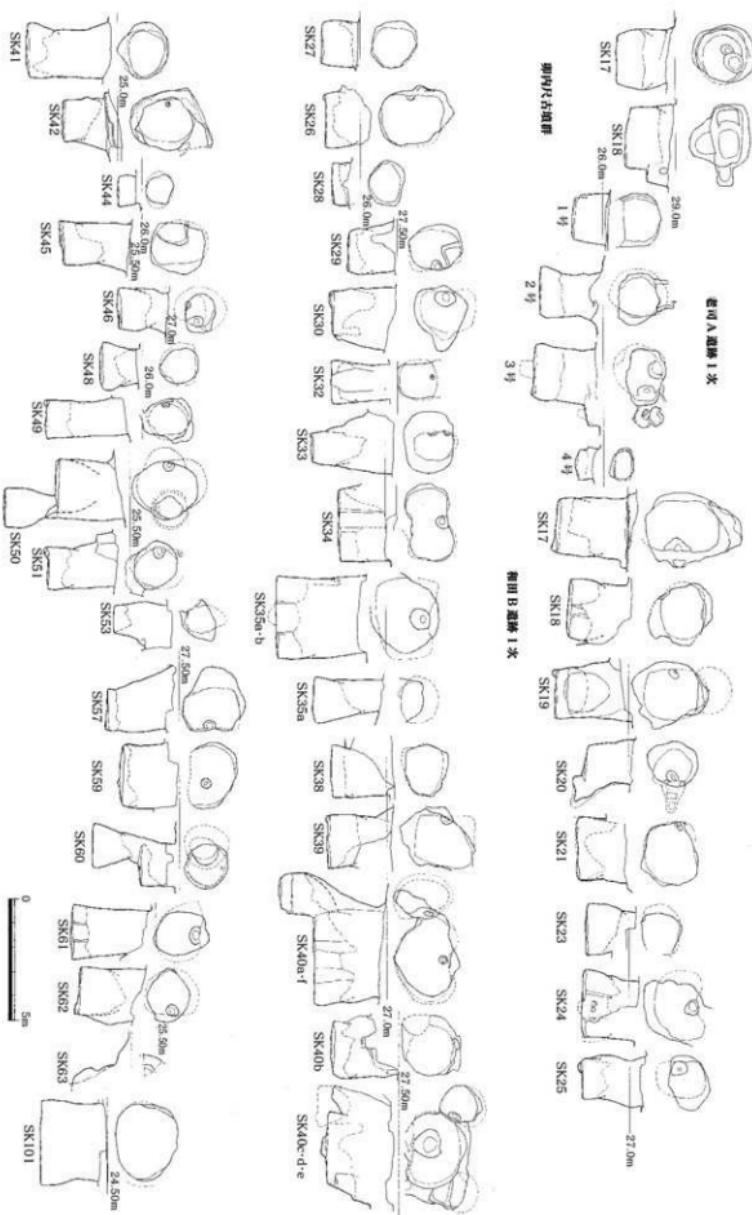


Fig.14 卵内尺古墳群・老司A・和田B遺跡の野戻穴集成 (1/200)

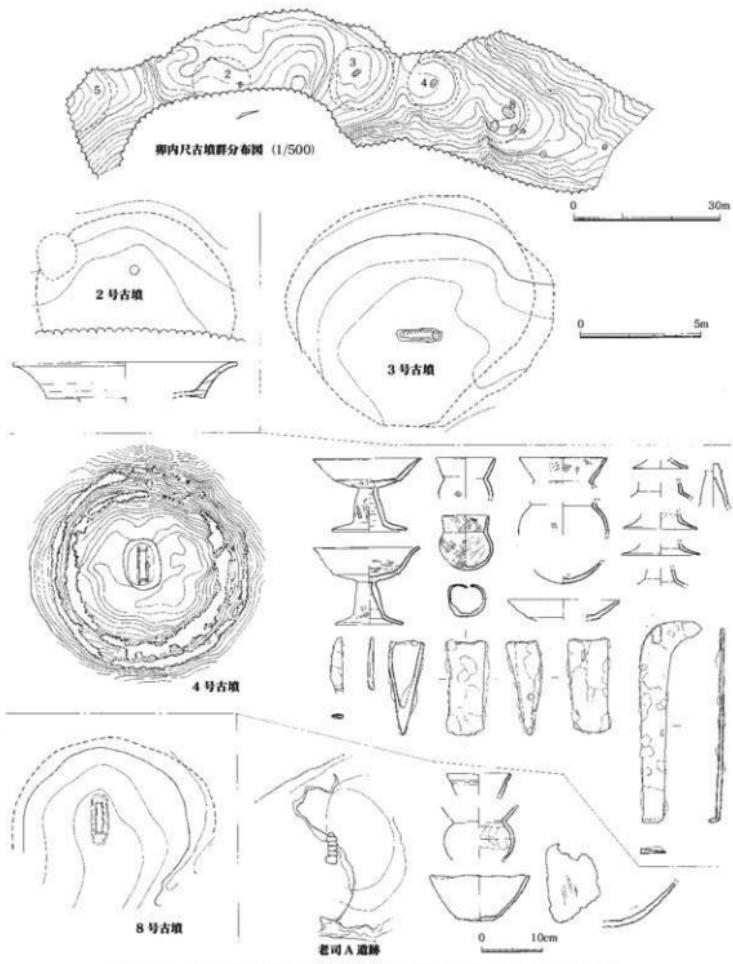


Fig.15 卵内尺古墳群・老司A遺跡の円墳群 (1/500・1/100)

#### 第四章 おわりに

これまで老司A遺跡の第1次調査成果について記してきた。今回調査は小範囲であり、弥生前期集落や古墳中期墓地の一端が明らかとなった。表面採集された遺物類 (Fig.5) にも弥生前期壺00001 (器色は黄褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多く、焼成不良) ・同壺底部00002 (器色淡灰色で、外面ヘラ

ミガキ調整。焼成良好)・土製紡錘車00004(体部径6cm・孔径6~7mm)・サスカイト製スクレーパー10001(頂部に打点をもつ横長剥片のバルブを調成し、端部・側辺に丁寧な細調整を加え刃器に仕上げる)・吉伊万里白磁碗00003(内湾気味の胴と低い高台で、梅花文をあしらう小型碗、口径9.4cm・器高4.3cm)等が知られ、弥生期の集落が更に周辺に展開していた事を窺わせる。

弥生時代の袋状竪穴は、その残存状況の違いや共伴する上器資料が少ないと等の制約から形状変化や時期毎の単位を十分に把握することは難しいが、貯蔵庫として雨水や害蟲の侵入対策・利用上の昇降施設は当然備わっていたものと想定できる。ここではその構造から大きく3類に分けた。

I類：比較的小型で、床面が円形～方形を呈し、開口部がよくすぼまる。木蓋等が想定される。

II類：床面が円～不整円形を呈し、壁面下部がプラスコ状。床の一端に柱穴あり(IIa)・同なし(IIb)

III類：壁面は外に開き、やや大型。長方形で、床縁に4~7個の柱穴あり(IIIa)・同なし(IIIb)

以下では弥生時代の袋状竪穴に就いて周辺遺跡を若干探って見たい。板付遺跡北台地では現標高8mの低丘陵で108基を検出。時期的に前期前葉で南北方向にIIIa類11基・同IIIb類16基が分布する。IIIa類は長軸線をほぼ東西方向に向けて並列する状況で、これらの周辺にIIIb類が散在する。続く前期中葉では32基とやや数が増え前葉と同様に南北線に沿いIIIa類4基が分布し、この周辺にIIIb類が集まる。また新たにI類が北端部に出現し、II類1基が見られる。前期後半にはIIIa類は姿を消し、同規模のIIIb類が残り、周辺に小型IIIb類が付き、散発的にI類6基、中央にII類2基が見られる。IIIa類は主要倉庫と見える。次に和田B遺跡1次では標高27m前後の丘陵端部に40余基を検出。時期は弥生前期(板付I・IIa期)のもので、類型はほぼ丘陵中央にII類がほぼ分布し、III類は見られない。次に影ヶ浦古墳群2次では標高40mの独立丘陵をほぼ完掘。56基を検出。時期は前期後葉・同末・中期末・後期初頭につながる。構成は、I類7基・IIa類8基・IIb類31基・IIIa類2基であり、II類を主とする。この様に遺跡毎に異なる傾向は、時期的特徴なのか立地上の要因であるか今後とも検討する必要がある。また、IIIa類に見られる床面縁辺の柱穴は、上屋を支える主柱と考えられ、五十川・板付遺跡例の床面柱穴が昇降用梯子の位置とすれば出入り口は平入りの可能性も考えられよう。

- (関係報告書) ①「板付-市営住宅建設に伴う発掘調査報告書 一九七一～一九七四」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集」1976・  
 ②「板付周辺遺跡調査報告書(6)」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集」1980・③「津古内塙遺跡-福岡県三井郡小郡町所在遺跡発掘・調査概要」1990・小郡町教育委員会・④「影ヶ浦古墳群1-影ヶ浦古墳群第2次調査報告」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集」1991・  
 ⑤「野多日台-野多日B・和田B第1次調査報告書」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集」1995・⑥「五十川 5-五十川遺跡第10次・11次調査の報告」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第1019集」2008・⑦「卯内尺古墳群-卯内尺古墳群第2次調査報告」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第1142集」2012

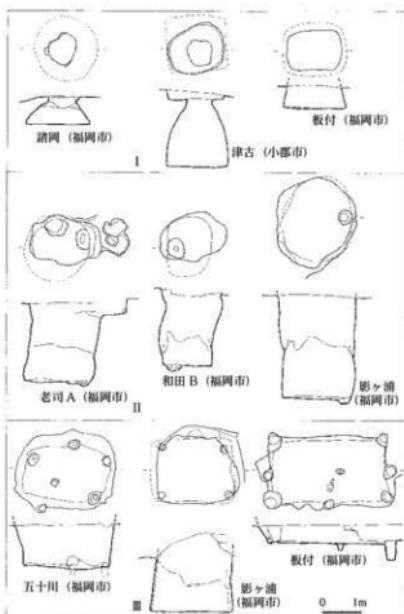


Fig.16 袋状竪穴類型図 (I/120)

図 版

PLATES





1.調査前現況（中央に石棺、南から）



2.石棺墓発見状況（東から）



3.石棺墓発見状況（南から）



4.調査作業状況（南から）



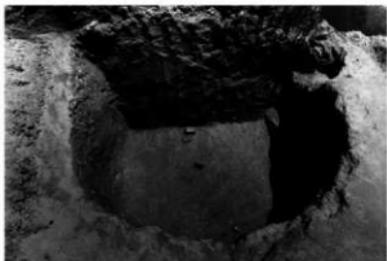
5.石棺墓調査状況（西から）



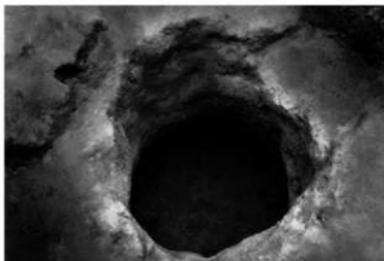
6.石棺墓調査状況（西から）



1.袋状竖穴群出土状況（西から）



2.第1号袋状竖穴出土状況（西から）



3.第2号袋状竖穴出土状況（南から）



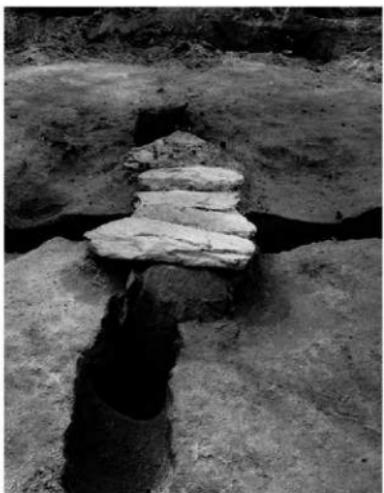
4.第3号袋状竖穴出土状況（西から）



5.第4号袋状竖穴出土状況（南から）



1.第1号石棺墓出土状況全景（西から）



2.第1号石棺墓出土状況（開棺前、南から）



3.第1号石棺墓出土状況（開棺時、南から）



1.第1号石棺墓出土状況（開棺時、東から）



2.同頭位石枕出土状況（南から）



3.石棺墓墳丘状況（南から）



4.第1号溝状遺構内土師器出土状況（北から）



5.第1号溝状遺構内土師器出土状況（南から）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ろうじえーいせき							
書名	老司A遺跡							
副書名	第1次調査							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1245集							
編著者名	横山 邦繼							
編集機関	福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	20140324							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ろうじえーいせき 老司A遺跡 1次	ふくおかしみなみく 福岡市南区 ろうじ 老司字本569	40134	7836	33° 31' 03"	130° 25' 16"	1978.0705 ~ 0720	50	専用住宅
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
老司A遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代	袋状貯蔵穴 弥生式土器	箱式石棺 土師器				

# 老司A遺跡

－第1次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1245集

2014年3月24日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 三栄印刷株式会社  
福岡市博多区千代1丁目6番1号